

国士館を支えた人々

会田 彦一



会田彦一
(体育学部第2期卒業アルバム掲載)

柔道とは何かと問われるならば、精力善用・自他共栄^{（イイ）}の道だと答えることが出来る。この二大標準こそ、講道館柔道の創始者である故嘉納治五郎先生が、あらゆる機会に強調された柔道の内在精神で



漆畑 真紀子

あり、この精神を忘れては、柔道の真の修業はあり得ないのである。即ち、柔道の修業によつて、身体を鍛錬し、精神を修養し、これによつて自己を完成し、世を補益するということに尽きている。(会田彦一『図解説明柔道講座 全巻』研文書院出版部、昭和三十一年五月五日)

これは本学で柔道を長年教授した会田彦一(あいだひこいち)の言葉である。国士館は一九一七(大正六)年の私塾創立より、心身の鍛錬・精神修養に武道の科目を開講し、特に剣道・柔道・弓道の修練を課してきた。一九二九(昭和四)年には国士館専門学校が開設するが、柔道の教員として招聘されたのが、会田彦一である。

柔道は今や世界中で競技され、オリンピックや世界選手権でも毎試合賑わいをみせる。今日にみるような柔道発展の会田の活動なくしてはあり得なかったであろう。

会田は戦前から教員として国士館柔道を支え、戦後の武道禁止の時代、国士館激動の時代も学園に寄り添い、長きにわたり国士館の教育・武道を支えてきた。本稿では会田彦一に焦点を当てる。

会田彦一は、一八九三（明治二六）年四月一日に山形県南村山郡東沢村小白川町（現山形市小白川町）に会田彦太郎の長男として生まれた。一九〇六（明治三九）年四月には山形県師範学校附属小学校高等三年を修業し、

一九一一（明治四四）年三月には山形県立山形中学校を卒業している。残念ながら、会田の幼少期を知るための資料がなく、柔道を始めるきっかけなどの経緯は知る術もないが、一九一六（大正五）年三月には東京高等師範学校体操専修科を卒業、一九一八（大正七）年三月に同校の研究科を卒業し、四月から同校嘱託として勤務、一九二〇（大正九）年五月に解嘱になっている。

同年六月には会田は、イギリスにあるロンドン武道会（Buddkwan）の講道館への正式な招請を受け、師である嘉納治五郎の撰により海外派遣されることとなり、同年

夏季に開催される第七回オリンピックアントワープ大会に国際オリンピック委員会委員として出席する嘉納に伴って渡英した。会田二七歳のときであった。数多い講道館の柔道家らを差し置いて会田が派遣された背景には、嘉納からの絶大なる信頼があったと思われる。海外派遣の目的は、欧州各国に正しい講道館柔道を普及させることだった。会田は約三年間イギリスに滞在してロンドン武道会を中心に数百人に柔道を教授し、ケンブリッジ大学やオックスフォード大学などの学生やサウサンプトンのカルシヨット海軍飛行学校にも出張して指導した。この時のことを、後年会田は次のように述懐している。

紺碧の空に浮び立つ巨大な彫刻の様な近代都市、濃霧につ、まれるロンドンの姿よりも、文化的な生活様式の印象よりも強く私の心に残るものは、国境を越え民族を越えて、その心と心を魂と魂とを柔道を通じて結び得た思出である。（中略）私は嘉納先生の知己に感激し、一切の虚飾と阿諛を排し、自分の真心と技術の限りを尽して共に修行した。（序にかへて）〔会田彦一「図解柔道」日本柔道研究会、昭和三十一年九月一〇日〕

イギリスでの教授経験により自信を得た会田は、一九二三（大正一二）年、ドイツにも柔道を普及させるべくベルリン行きを計画するも、当時のベルリンは第一次大戦の痛手から排他的で、外国人の入国の許可が得られなかったため、ミュンヘンで警察学校やミュンヘン柔術クラブを中心にその普及に努めた。翌年の一九二四（大正一三）年には、第八回オリンピックパリ大会でレスリング審判員およびレスリング日本代表選手内藤克俊のマネージャーを引き受けている（ちなみに、柔道がオリンピック正式種目として登録されるのは、一九六四〔昭和三九〕年開催の第一八回オリンピック東京大会からである）。当時の日本ではレスリングは全く行われておらず、指導者もいなかったが、会田がオリンピック日本選手の応援のために会場を訪れていたところを、内藤と旧知の仲であり、さらに会田が当時柔道五段で内藤の練習相手にも最適とのことからマネージャーを依頼された。内藤はもともと講道館柔道二段を取得するほど柔道を修めていたが、一九二〇（大正九）年にアメリカのパシフィック州立大学へ留学し、レスリング部に入部すると、学生チャンピオンに昇りつめ、部のキャプテンとして活躍していた。一九二四（大正一三）年に駐米大使

であった埴原正直から日本体育協会に内藤をレスリングのオリンピック代表選手に推薦する手紙が送られ、それがきっかけとなり内藤が日本選手代表に選ばれたのである（第一八回オリンピック・メモリアルグッズコラム三上孝道「内藤克俊の銅メダル」レスリング界初のメダル」〈<http://www.joc.or.jp/column/Olympic/goods/20070426.html>〉アクセス：二〇一五年一二月二日）。内藤はこのオリンピックで見事第三位の成績を収め、銅メダルを獲得した。この第八回オリンピックパリ大会における日本代表選手のメダリストは唯一内藤のみであり、日本レスリング界初のメダルとなった。内藤は大会後に、柔道とレスリングについて「日本では柔道と



会田彦一と内藤克俊（『オリムピックみやげ—第八回巴里大会記念』掲載）

レスリングの差を充分に研究し、更にグレコローマン型と自由型の区別を十分に研究して柔道家始め多くの人が是を行ひ、次回アムステルダムの大会にはフルチーム（七人）を出すやうにすれば大に勝算あると思ひます。

（中略）殊にキヤツチ・アズ・キヤツチ・キヤンは、グレコ・ローマンに比し、日本柔道家には特に適當かと存じます」（内藤克俊「キヤツチ・アズ・キヤツチ・キヤンは柔道家に最も適當」『『オリムピックみやげ―第八回巴里大会記念』大阪毎日新聞社、大正一三年一〇月三〇日）と分析しながら、起居を共にし厳しいトレーニングを重ね、内藤を最後まで支えた会田に対し「会田君の御親切なマネージメントには感謝せずに居れません」と感謝の念を綴っている。

同じく会田もこのオリムピック大会を受けて、柔道とレスリングの違いを詳細に分析しつつ、柔道の世界発展の可能性について述べている。

一言にしていへば、柔道は通常着にての真剣勝負より発達し、レスリングは全然裸体にて肉と肉との戦ひであり、然も一定の形によつて発達したるゲームと存ぜられ候（中略）柔道とレスリングとはその出発主眼が相違致し居り候ためその優劣等は全然いは

ざるを可と存じ候。只吾人の柔道を基礎としてこれを研究せば、必ずこの国際競技に出場しても優秀なる成績を得らるべしとは前にも申したる如くに御座候。又柔道の世界的発展もこれ等を同化して初めて望むべきもの、やうに感ぜられ申候。吾々柔道の真の修業者は、如何なる場合何者に遭遇致し候も飽迄平静、変に应じて最善の方法手段を講じ善進出来る丈けの覚悟と修業とが必要とする以上、柔道の健全なる発達進歩は此の意味に於て深くレスリングを研究して初めて達せらるものと感ぜられ申候。（後略）（会田彦一「柔道とレスリング」〔前掲『オリムピックみやげ―第八回巴里大会記念』〕）

会田はこのオリムピックが始まる前の一九二三年六月よりフランスの上流人や著名人を会員とするスポーツクラブ「デュフランス」や「サークルホッシュ」から招聘されてパリにおいて、講道館の先輩でありフランス大使館参事官である杉村陽太郎らの世話になりながらパリで柔道を教授し、柔道普及に努めた。

その後会田へ、かつてイギリスのロンドンで教えていたドイツの男爵ウァールワッツ夫妻からドイツ柔道のため指導してくれないかとの懇望があり、ドイツベルリン

柔術クラブ連盟とシユパンダウの警察学校の正式な招聘により、一九二六（大正一五）年の夏、パリを後にして待望のベルリンに移転。当時はベルリン市民も熱烈な歓迎ぶり、ドイツの新聞では会田のベルリン入りを報じ、柔道の公演会場にあてられた大公会堂は満場立錫の余地もないほどの盛況であったという。ドイツの報道では大々的に日本柔道の真価を賞賛し、これを機にドイツ柔術は講道館柔道に傾倒してくるようになった（前掲「序にかへて」『図解柔道』）。ドイツでも約二年間柔道教育に努めた会田は、一九二八（昭和三）年一二月、日本に帰国した。渡欧してから約八年間の歳月を経ていた。帰国後の一九二九（昭和四）年一月には講道館柔道六段に列されている。

国士館と会田の出会いはこちらからである。

先述したように、一九二九年四月に、中等教員の養成を目的とする国士館専門学校が開設されると、講道館の錚々たる柔道家が講師陣に迎えられ、嘉納治五郎の高弟であり講道館四天王として知られる山下義韶や飯塚國三郎とともに会田も柔道教員に就任した（厳密に言えば、山下や飯塚よりやや遅れて就任）。会田の帰国時期から推算するに、国士館専門学校が開設されるにあたり、嘉

納から招聘されたとも考えられる。一九二九年一月三〇日に申請した国士館専門学校設置認可申請書類中の「初年度採用教員予定表」には、武道（柔道）の専任教員として、山下義韶、見せ消ちされた嘉納治五郎の名と、その脇に嘉納の代わりに飯塚國三郎が記されている（同年三月一日認可）。余談になるが、このことから専門学校開設計画当初、嘉納治五郎が自ら国士館で教授する予定だったことが窺える（補足だが、専門学校設置認可を知らせる麻生太吉宛て柴田徳次郎書簡（一九二九年三月九日）の中では、「主ナル教授及名誉講師」一覧に嘉納治五郎が「名誉講師」として、山下義韶と飯塚國三郎は「柔道教授」として記されている）。しかし、この時点では会田の名前は教員の一覧には表れず、実際には同年五月一二日の専門学校の教員追加申請で、会田は専門学校武道（柔道）教員として採用された（七月八日認可）。専門学校は先述したように、中等教員の養成、具体的には武道の教員養成が目的だった。その当時、武道教員養成校といえ、会田の出身校である高等師範学校と大本武徳会武道専門学校、国士館に限定されていたため、国士館へも全国から生徒が集結し、会田はその育成指導にあたった。

会田は国士館のほかにも、一九三三（昭和八）年四月

には法政大学で柔道講師を兼任していた。また、柔道指導の傍ら、自身は一九三六（昭和一一）年二月には講道館柔道七段に列され、同年一月には文部省中等全国中等学校教員武道講習会講師、一九四一（昭和一六）年一月には文部省中等学校教員長期武道講習会講師、一九四三（昭和一八）年六月には講道館審議会委員を務め、一九四四（昭和一九）年二月には講道館柔道八段を授与されている。

話が多少それるが、ここで戦中・戦後の柔道教育について言及しておく。一九三八（昭和一三）年に国家総動員法が施行されると、徴兵検査の合格率が年々低下していたこともあり、積極的に青少年の体位を向上させ国防能力の低下をくい止める目的で、一九三九（昭和一四）年に厚生省により「体力章検定」が開始される。これはいわば体力テストで、一五〜二五歳の男子を対象として各学校で代行して実施された。この制度は一九四〇（昭和一五）年四月の国民体力法によって成文化される。一九四一（昭和一六）年には国民学校令により従来の「体操科」は「体錬科」に名称を変え、この教材として「教練」「体操」「武道」（剣道、柔道、銃剣道）が課せられ、柔道と剣道は偏ることなく併せて行い、武道は常に

攻撃を主眼として鍛錬することが求められた（藤堂良明『柔道 その歴史と技法』日本武道館、二〇一四年三月二〇日）。特に柔道の鍛錬内容は、基本として礼法や当身技が教えられ、応用として極技と投技があった。投技よりも当身技が重視されたあたり、戦時下において柔道が実戦を目的とした教材に変えられたことの証としてみることができる。このことから、中等教員養成を主眼としていた国士館においても、武道の指導が戦技としてより一層重視されるようになったことは想像に難くない。一九四三年三月には体育局長通牒で「戦時学徒体育訓練実施要綱」が出された。これは文部省が学徒体育訓練の重点種目を指定して積極的指導に乗り出したもので、特に男子にあつては卒業後直ちに軍人として戦場に赴くのに必要な資質の育成に努めるものだった。この訓練種目は戦技訓練・基礎訓練・特技訓練の三種に大別され、銃剣道は戦技訓練、剣道・柔道は基礎訓練に指定され、武道が本来の意味である精神修養よりも戦力増強に利用されていくこととなる。

一九四五（昭和二〇）年八月に終戦を迎えると、GHQ（連合国軍総司令部）が先頭に立ち、その一部局であるCIE（民間情報局教育部）は、日本の民主化政策の一環として武道を軍事的な技術とみなし、国民に軍国主

義を養成するものとして警戒した。その結果、文部省は同年十一月に「武道の取り扱いに関する件」（発体八〇号）を通知、学校武道の正課での取り扱いだけでなく、課外活動まで禁止した。これにより、学校柔道は剣道と弓道同様に禁止された。

国士館では戦後、文部省の要請を受けて、一九四五年一二月に財団法人国士館寄附行為を変更、法人名を「至徳学園」へと改称した。これに伴い、国士館専門学校も至徳専門学校に改称した。武道の教員養成を目的とした専門学校では、学校武道の禁止を受けて同年三月に剣道科・柔道科・弓道科を廃止、国語科・地理科・歴史科を新設した。

柔道が禁止された専門学校で、会田は体育の教員として指導を行った。一九四六（昭和二一）年一月一日の至徳専門学校学則変更申請書類での学科課程表には体育科目として「体操」と記されており、会田の履歴書（短期大学設置認可申請時）にも本務が「至徳専門学校教授体育」と記されていることから確認できる。一九五〇（昭和二五）年九月のGHQによる覚書「学校柔道の復活について」によって、漸く学校柔道が復活することになった（前掲『柔道 その歴史と技法』。会田の履歴を



1956（昭和31）年頃 会田彦一と短期大学体育科学生（中列中央が会田彦一）
（『国士館大学柔道80年史—国士館を創った人達と柔道部の歴史』掲載）

みると、一九五三（昭和二八）年の経済科（二部）と国文科を擁する国士館短期大学創設時には「体育（実技・理論）」の専任講師、その後一九五六（昭和三一）年四月の短期大学体育科設置申請の際に「体育方法（柔道）」と、ようやく「柔道」の文字が確認できる。この頃には会田は国士館のほかに法政大学や明治薬科大学でも柔道師範として指導し、講道館審議委員、講道館国際委員、全日本柔道連盟評議員などの要職も務めていた。

一九五八（昭和二三）年に国士館大学が創設され体育学部が開設すると、会田は体育学部教授に就任した。同時に、国士館大学柔道部初代部長としても活躍し、後進の育成に力を注いだ。同年の五月には講道館柔道九段を授与され、また、年月は不詳だが勲三等の叙勲を受けている。

会田は、法人の役員としても国士館を支えた。

一九五一（昭和二六）年頃には法人理事を務め、その後一時理事を離任するが、一九六六（昭和四一）年三月一四日に再び理事に選任されている。また、一九五七（昭和三二）年九月頃には評議員に、一九五九（昭和三四）年四月頃には監事に就任している。一九六六年三月一四日には監事を辞任するも、理事・評議員は亡くな

るまで務めた。

会田は常に教育現場の一線に立ち、後進の育成に力を注いでいたが、一九七二（昭和四七）年二月一八日、心臓麻痺のため世田谷区豪徳寺の自宅で急逝した。七八歳であった。

会田の人柄や柔道に対する姿勢は実直・温厚篤実そのものであったようだ。嘉納治五郎の次男であり、講道館館長を務めた嘉納履正は「其技の美しさ稽古の優秀さは斯界の定評のある所」（嘉納履正「序」〔前掲『図解柔道』〕）であると評している。また、東京高等師範学校在学当時の師であった講道館十段長岡秀一は「在学当時より、鋭くきれいな技と、真摯な人格とによつて重きをなし（中略）その経歴よりしても、柔道指導者著述の適任者ありとすれば、君こそその人である」（永岡秀一「序」〔前掲『図解柔道』〕）とし、また、「知友」であり文部省文部次官を務めた西崎恵は「その技の優秀見事な稽古振り、人格の温厚篤実、柔道界稀に見る人物である」（西崎恵「序」〔前掲『図解柔道』〕）としている。

国士館でも教え子から慕われ、体育学部一期生の盛島博は「最初の柔道の授業で会田先生は『諸君は将来立派な柔道教師になるのであるから、正しい姿勢で組み、正

柔道は、これからも受け継がれ発展していくのだろう。

攻法の柔道を心がけなさい』と訓辞(しんじ)されました。そのことは四〇数年経た今も、ありありと身体が覚えています」(「国士舘大学柔道部時代の思い出」〔上野孫吉「国士舘大学柔道八〇年史―国士舘を創った人達と柔道部の歴史―」国書刊行会、平成一一年四月二六日〕)と回顧し、同じく一期生の川人芳正は「嘉納先生の直弟子であつた会田彦一先生は、いつも端正に正座され、厳しさと慈愛に満ちた姿で見守ってきた(つと)だき、学生から敬慕されていた」(「朝稽古と寮生活」〔前掲「国士舘大学柔道八〇年史―国士舘を創った人達と柔道部の歴史―」〕)と会田の印象を振り返っている。

最後まで学生とともにあつた会田の言葉に、次のものがある。

私の蒔いた種は誠に取るに足らぬが、柔道の強い生命力は必ず世界各国に開花結実する事を信じ(中略)母校の高師や国士舘、法政大等に教鞭を取つて来たのも学生と共に正しい柔道を培いその発展を祈る悲願に外ならない。(会田彦一「序にかへて」〔前掲『図解柔道』〕)

柔道を精神修養の手段と捉え純粹に柔道の発展を願う、柔道の伝道者・教育者であつた会田が築いた国士舘